

●交流内容

図工 牛乳パックで 工作をしよう

現場の実践紹介②

幼小の“段差”を なめらかな“坂道”へ

子どもや教員が楽しめる交流活動を通して

ながつた幼稚園（横浜市）の幼小連携の取り組みの歴史は長く、今では同園や小学校にとって連携は不可欠な活動として定着しています。近年、新しいまちづくりが進む同地域において、幼小の交流活動は、地域の子どもたちや保護者同士がつながる機会としても大きな役割を果たしているそうです。公私立そして幼小の垣根を越えた取り組みはどのように行われているのでしょうか？

これまでの取り組み

04年度から取り組みが本格化

ながつた幼稚園といぶき野小学校が本格的な連携を開始したのは、04年度に横浜市教育委員会の「幼・保・小教育連携開発モデル校」（2年間）の指定を受けたことがきっかけでした。これを機に、異年齢の子どもの交流だけでなく、職員間や地域との交流活動も充実させてきました。指定校の期間が終了した後も、その取り組みは継続され、現在は4歳児と2年生、5歳児と1年生それぞれ年3回の交流を中心に行っています。

今回の交流活動について

9月30日、今年度2回目となる4歳児と2年生の交流が実施されました。内容は図工の教科交流で、次のようなねらいのもと、一緒に牛乳パックで工作をしました。

《4歳児》

- ・前回の交流で信頼を深め、仲良くなった2年生と親しみをもって楽しく交流する。
- ・初めての小学校に期待をもち、楽しく過ごす。

《2年生》

- ・交流を通して、園児に優しく接し、楽しく遊ぶことができる。

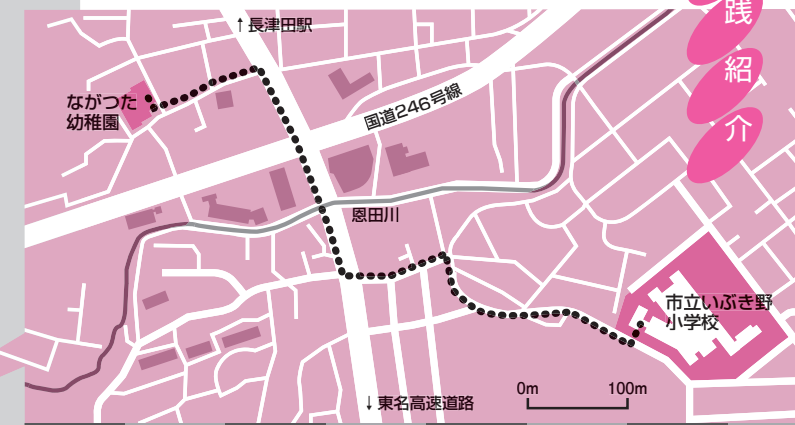


幼稚園バスに乗って小学校へ出発！

10:00

当日の様子

日時：2008年9月30日（火）
場所：小学校 各学級クラス



小学校へのお出かけはみんなうれしそう。小学校へは交通量が多い道もあり、園児の足で歩くと徒歩約20分の道のりがあります。この日は雨のため、園バスでの移動となり、150名の園児を運ぶためにバスは2回往復しました。



小学校に到着

10:50

小学校の多目的ホールに集合し、案内係の小学生を待ちます。初めて来た場所に、園児たちはワクワクしたような表情を見せながらも少し落ち着きません。



1回目の交流で作ったカードを見る子ども

前回の交流で一緒に遊んだカードをじっと見つめています。カードには自分の名前と1年間を通してペアとなる2年生の名前が書かれています。



1回目の交流では、幼稚園でスタンプゲームをしました。



一緒に教室へ

お兄さんやお姉さんに誘導されて教室に向かいます。



幼稚園

学校法人 長津田学園
ながつた幼稚園

キャッチフレーズは、「素敵な夢を持てる少女になるために」。広い園庭や室内温水プールがあり、子どもたちは元気いっぱい遊び、心身の健康や自立心をはぐくんでいる。

園長●森 慎互 先生
所在地●〒226-0027 神奈川県横浜市緑区長津田7-4-11
園児数●約445名（14クラス）



小学校

横浜市立
いぶき野小学校

2008年度は横浜市教育委員会より「パイオニアスクールよこはま」の指定を受け、新しい時代の要請に応じた教育の実現や地域の特性に応じた教育の提供を目指している。

校長●丸本 茂樹 先生
所在地●〒226-0028 横浜市緑区いぶき野14番地1
児童数●1121名（34学級）





作品を使って体育館で思いきり遊ぼう！

作品ができあがった子どもたちは、体育館に移動。牛乳パックで作ったパッチンと飛び上がるカエルの工作やフリスビーを使って、思いきり遊びました。

11:50



自分の相手と手をつないで帰る準備へ

一緒に遊んですっかりうちとけた様子。片手にはしっかり今日の作品を持って帰る準備をします。このあと、園児は体育館で持参したお弁当を食べ、今回の交流は終了しました。(13:10に幼稚園に到着)

●後日、教職員反省会を実施(いぶき野小学校にて)

13:10



ハサミを使ってみよう

4歳児にとって、使い慣れないハサミで硬い牛乳パックを切るのは少し難しかったようです。なかなか切れずに戸惑う園児を見て、「ここはぼくが切るよ」、「手を切っちゃうから、ここ(ハサミの刃)は持っちゃだめだよ」など、弟や妹に話しかけるように、優しく聞きとりやすい口調で話しています。

▼ながつた幼稚園の掲示板
近隣の小学校や保育所と交換したお便りを掲載し、地域の様子を保護者に伝えています。



幼小は年に3回の交流を中心に。保育所との交流も

幼小連携の中心は4歳児と2年生、5歳児と1年生それぞれ年3回の交流です。毎年交流の大枠は、幼・保・小の園長・所長や校長をはじめとする10数名が参加する代表者会議で決定します。子どもや教員の負担を減らし、スケジュールを合わせやすくするため、現在は小学校と保育所はそれぞれに交流する、各活動の打合わせは1回にする、指導案は簡略に、などの工夫もしています。



小学生が歓迎の歌を合唱

最初はおとなしかった園児も「となりのトトロ」など親しみのある歌を小学生が歌うと、次第にリラックスした様子になっていきます。



小学生と一緒に工作をする園児たち

小学生が自分の席に園児を座らせて作業しています。ほかの学級の教室では、机は使わず自由に床に座って作るなど、学級によって取り組み方はさまざまです。

11:00



交流会の流れを黒板に掲示

「交流会でどんなことをすると楽しいだろう?」と、小学生が一生懸命交流の内容を考えました。



牛乳パックで作ったフリスビーに色ぬり

小学生の「どの色が好き?」などという問いかけに「ピンク!」などと答えながら色をぬっています。ペアとなる相手は年間を通して固定していますが、これには、子どもが回を重ねるごとに緊張がほぐれ、のびのびと個性を發揮するようになるというねらいがあります。

【幼・保・小 連携交流年間スケジュール (2008年度)】

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
幼小連携			打ち合わせ①	交流会① (幼稚園で交流)	打ち合わせ②		交流会② (小学校で教科交流)			交流会③ (小学校のイベントで交流)		
			打ち合わせ①	交流会① (幼稚園で交流)		打ち合わせ② 交流会② (小学校で教科交流)				交流会③ (小学校のイベントで交流)		
幼保連携			交流会① (幼稚園で交流)					交流会② (小学校グラウンドで交流)		餅つき (幼稚園で交流)		
教員の交流	代表者会議① (年間のスケジュール確認)		代表者会議② (合同研修の打ち合わせ)	職員 合同研修会								代表者会議③ (1年の振り返り、次年度構想)

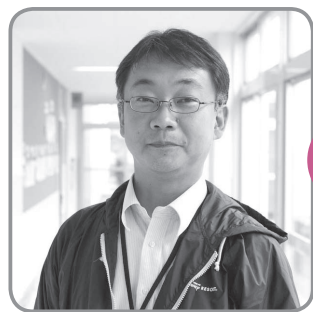
小学校からの声

年少の子どもに接することによって子どもたちに表れる明らかな変化

幼小連携が進むに伴い、これまで、幼稚園の教育について、ほとんど何も知らなかったことに気付きました。以前は、落ち着きのない子どもを見ると、「もっと、しっかりと指導してほしい」などと、幼稚園に対して不満をもつことがあったのも事実です。しかし、何度も幼稚園に足を運び、教育の現場を見るにつれて、幼稚園は小学校とは異なる方針のもと、幼児期にふさわしい教育を提供していることを理解しました。

ながつた幼稚園との連携によって、子どもたちは明らかに変わりつつあります。小学校では、低学年は年下として扱われることが多いのですが、園児を前にした子どもたちは、ふだんとは異なる、“お兄さん”“お姉さん”としての顔を見せます。そのような経験を通し、「しっかりしなきゃ」という自覚や人を思いやる気持ちが芽生えているのは確かです。本校の児童は、文部科学省による全国的な学力調査では「人の気持ちが分かる人間になりたいと思う」「将来の夢や目標を持っている」といった項目が高くでていますが、これは幼小連携の取り組みとは無関係ではないと考えています。とくに、一人っ子の子どもにとっては、このように年下の子どもに何かを教える機会は貴重で、保護者の方々もとても喜ばれています。

いぶき野小学校では、同時に中学校との連携の充実化を図っており、幼稚園・保育所から中学校までを見据えた教育を提供できる体制を整えたいと考えています。同時に、地域社会との協力関係を強化するなど、広い視野をもった取り組みを充実させていきます。



いぶき野小学校 教務主任
能登 正明 先生



ながつた幼稚園 教務主任
小山 哲央 先生

幼稚園からの声

教育方針の違いが最初の壁 交流を通じて子どもや教員に変化が

交流をはじめ、最初に驚いたのが、子どもの育ちに関する幼稚園側と小学校側の考え方の違いでした。幼稚園側が「少し手を貸せばたいはいのことはできる」と考えるのに対して、小学校側は「手を貸さなければ何もできない」と評価する。お互いの教育の方針や内容について、ほとんど知らなかったのだと思いました。手探りで進めてきた交流活動でしたが、園児は小学生に優しく教えられ、「小学生は優しいな」「自分も、ああいうふうになりたいな」といったあこがれの気持ちが芽生えているようです。そして、交流の感想を聞くと大半の園児が「楽しかった!」と口をそろえます。「小学校は楽しいところ」という印象をもって入学すれば、その後の意欲や姿勢に好影響が生じることは想像に難くありません。

また、一連の交流活動は保護者にも喜ばれています。「自分の子どもは小学校でやっていけるだろうか」という不安は、多少なりとも、多くの保護者が抱いているものです。小学生との交流について楽しそうに話す子どもの姿は、保護者を安心させているようです。

教員自身の変化もありました。とくに若い教員の成長が著しく、経験豊富な小学校の先生方と、教育について対等に話そうとする努力が成長につながっているようです。

小学校の学習を先取りして教えるのではなく、園児が小学校の中に入って見せてもらうことによって、私たちは、本来、幼稚園がすべきことに専念できると考えています。

まずは接点をもつことそして教員自身が楽しむこと

まずは小学校との接点をもつことが大事でしょう。私は、小学校や保育所に園だよりを持参することから関係づくりを始めました。幼小連携は、開始当初こそ、苦労が多いものの、次第に子どもの変化などが表れ、喜びが勝るようになってきます。だから、最初ががんばって、後は教員自身が小学校の教員との交流を楽しみながら、“気楽”な気持ちで臨むと良いと思います。幼小連携が軌道に乗って子どもが生き生きと楽しむ様子が見られれば、本当に有意義な活動であることが実感できるはずですよ。

お話をうかがいました

ベネッセ次世代育成研究所について

少子高齢化、核家族化のさらなる進行、女性の社会進出、経済のグローバル化、ITによる情報化など、社会環境の変化が加速し、家族のあり方や親子関係を含めた子どもの成育環境に大きな変化が起こっています。

ベネッセ次世代育成研究所は、子育て世代の生活視点を大切にしながら、妊娠出産、子育て、保育・幼児教育、子育て世代のワークライフバランスを研究領域として、家族と子どもが「よく生きる」ための学術的な調査研究と体系的な理念の構築を行います。

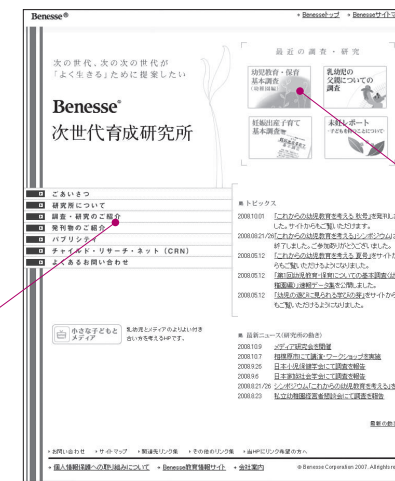
また、その調査研究成果を子育て世代を支える産科・小児科などの医療機関、保育・幼児教育の専門家の方々に発信し、よりよい子育て環境を作る一助となることを目指します。

さらには、調査研究ネットワークを海外へも広げ、複眼的、学際的視点から日本の次世代育成を考えていきます。

調査結果をホームページでもご紹介しています。

発刊物・調査結果の無料ダウンロードや、詳細な報告書の購入申し込みができます。

シンポジウム等の最新情報は、ホームページをご覧ください。



発刊物のご紹介

「これからの幼児教育を考える」バックナンバーや、幼児の遊びにみられる学びの展開を事例集にまとめた「学びの芽」が無料でダウンロードできます。

調査・研究のご紹介

幼児教育・保育についての基本調査、乳幼児の父親調査、乳幼児のメディア視聴に関する調査結果などが無料でダウンロードできます。

<http://www.benesse.co.jp/jisedaiken/>

(各種検索エンジンで「ベネッセ次世代育成研究所」と検索してください)

これからの幼児教育を考える

2009 春号

2009年1月20日発行

発行人：新井 健一

編集人：後藤 憲子

印刷・製本：(株)協同プレス

企画・製作：ベネッセ次世代育成研究所

デザイン：森一典デザイン事務所

執筆協力：二宮良太

撮影協力：ヤマグチイッキ

発行所：(株)ベネッセコーポレーション

〒101-8685

東京都千代田区神田神保町1-105

神保町三井ビルディング

TEL.03-3295-0294

© ベネッセ次世代育成研究所 無断転載を禁じます。

編集後記

今回は幼稚園教育要領の改訂の大きなポイントのひとつでもある「幼小連携」を中心にご紹介しましたが、いかがでしたか？ 取材にうかがった園に、小学校との交流による変化を尋ねたところ、「まず、先生が変わった」という答えが返ってきました。交流を通して、お互いの保育・指導の目的や背景を知り合うことで、子どもの見方や接し方が変わってきたというのです。そして、子どもたちがお互いを信頼して、本当に楽しそうにしている様子を見ることが、幼小の交流活動を続けていく原動力になっているとも教えていただきました。幼稚園から小学校への移行をなめらかにする中で、子どもたちが互いの交流から学び合う関係をつくるのが大切と言います。同時に、先生同士も学び合う関係が不可欠なのだと感じました。(杉田)